

# 夢をつなぐ

南米ハワイのウチナー社会

<2>

八月二十三日にサンパウロの東洋街の中心部で行われた祝賀パレードには約千五百人が参加し、沖繩の伝統芸能文化を次々と披露し、沿道を埋めた地域住民を圧倒した。ブラジル社会での県系人の存在感の大きさを印象づける一方、移民社会の歴史と未来を表す縮図のようにも映った。

初期移民は、コーヒー農園での過酷な労働やマラリアなど風土病との闘いを経て、新しい開拓地

を求めて各地を転々としながら県人植民地を次々と建設し、後続移民の受け皿をつくった。

パレードは、先人の功績に敬意を表すため、九十五歳以上のお年寄りによるカシマヤーで開幕。今年十二月に百歳になる上地マツさん(名護市出身)も元氣な姿を見せた。二十歳で渡伯したマツさんは「朝から晩まで馬と同じように働いた」と労苦と努力の日々を振り返る。約八十年のブラ

## 伝統文化を着実継承

シル生活で子ども五人、孫十五人、ひ孫十三人に恵まれた。遠く離れた沖繩への癒やしがたい郷愁の念にも度々襲われたが、家族が支えとなった。

一方、パレードには三世、四世も数多く参加し、太鼓や踊りを誇らしげに披露した。

青少年でつくる太鼓集団、レキオス芸能同好会の上地宝智恵さん(三三)は、父親がブラジル人、母親が県系二世の三世で、一年前から琉舞と併せて太鼓を習い始めた。「歌ったり踊ったり、沖繩の文化を披露できることは楽しい」と屈託ない

県人移民95周年祝賀パレードで、太鼓を披露する県系3世の上地宝智恵さん(中央)＝8月23日、サンパウロ市のガルボンブエノ街



## 若者に大きな自信と誇り

笑顔を見せた。十二歳で渡伯した同会の大嶺初枝代表(五四)は「日本語を話せない若世、四世の子もたちがほとんど。沖繩の文化や芸能をしっかりと受け継いでほしい」と話した。

「琉舞の天才少年」として県内関係者の間でも知られる県系三世の斉藤悟さん(二六)は「沖繩の文化が好き」とウチナーンチュそのものだ。

祖母の新垣春子さん(六五)大里村出身二世の琉球舞踊のビデオテープを幼いころから見ているうちに、三歳で「谷茶前」、四歳で「高平良方

歳」を完ぺきに踊ったという。

日本語を話せない若世代は、琉舞や三線、鼓などを通してウチナーンチュとしての自信と誇りを身に付け、アイデンティティーの確立につながっているようだ。

パレード実行委員長を務めた与那嶺真次(県人副会長)は「名護市出身の三三は「ワッター島グナサンガ、ワッターン会やマギサンドー(沖の島は小さいが、ブラジルの県人社会は大きい)」と、次世代への伝統文化の継承に自信を寄せた。

(政経部・外間聡)

ブラジル中